



夢とバツタを追いかけて

私にとって「夢を語ること」は少し照れくさい。笑われたらどうしよう、もし叶わなかったらカッコ悪い、そんなふうに思ってたなか口に出すことができないのだ。それに比べて著者は、「虫を愛し、虫に愛される昆虫学者になりたい」という夢を堂々と語る。

本書には、その夢を実現させるためにアフリカへ向かい、バツタの研究に取り組んだ日々が綴られている。

「夢を叶えるためにどんな苦勞が待ち受けているのか、想像もできなかった」。言葉の壁、文化の違い、容赦のない自然の力…アフリカでの研究は予想以上に厳しいものだったということが、著者の言葉から伝わってくる。しかしそれでも、彼が折れることはない。持ち前のポジティブさと溢れるユーモアで、立ちちはだかる困難を次々と乗り越えていく。

たとえば、英語とフランス語を混ぜた独自

の言語を生み出し、言葉が通じない仲間とコミュニケーションを取る。文化の違いはむしろ楽しんで、現地の生活に自然と溶け込んでいく。研究対象のバツタとなかなか遭遇できないという非常事態でさえ、他の生物を夢中になって研究し、自分の糧にする。

「夢の裏側に隠された真実を知ること、また一歩ファーブルに近づけた気がしていた」

夢を追う者たちが必ず直面する、厳しい現実の数々。その「裏側」の部分を無視して、夢を叶えることは絶対にできない。

私は著者のようにまっすぐ「夢の裏側」と向き合えているだろうか。嫌なことから逃げて、苦しいことを避けようとしていないだろうか。著者が憧れるファーブルも、私が憧れる人々も、いつだってキラキラしている。しかしその人たちもどこかで「夢の裏側」と向き合って、闘ってきたのだ。

最後に著者はこうも言っている。「叶う、叶わないは置いといて、夢を持つと、喜びや

楽しみが増えて、気分よく努力ができる」。

夢を持つことに対して難しく考える必要はな

い、シンプルな感情でいい。本書はそう教え

てくれる。そしてその夢は、語ることから始

まるのだ。